

本セッションでは、アマモ場、底泥・干潟を対象とした調査研究について4件の発表がなされた。

2-C-09-3は、二枚貝類の現存量や沈降物量の変化からアマモ場造成後の生物飼集効果の検討を行ったものである。調査結果より、アマモ移植により葉上生物の増加を起点に高次の移動性魚類の増加を引き起こし、対象区との比較からもその有効性が伺えた。また、アマモ場造成による波浪の影響が軽減され、餌資源としての沈降物も多くなる一方で、アマモ群落内が必ずしも二枚貝の生息に適しているとはいえないとの結果が得られたのは興味深い。

2-C-09-4は、アマモ場消失の原因に着目した研究で、播種と移植によるアマモの生育状況を調査したものである。調査結果から、いずれの場合も6～7月にかけて株数を増加させるものの、8月以降減少を続け、12月には全滅に至った。アマモの維持に必要な水中光量子量は問題ないものの、夏以降の海草食害生物・アイゴによる食害がアマモの生残率低下の主要因との結論に至った。食害防止策等を含めた検討の必要性があろう。

2-C-10-1では、有明海の干潟底泥上に形成されると思われるEPSによって、底泥の安定性に寄与しているとの視点から、その吸着特性と物理特性を明らかにしようとしたものである。実験では泥とEPSの混合物から底質への吸着量の評価を行うとともに、粘度計によるレオロジー特性からEPS混入と海水との相乗効果から粒径増大や粘性増加を明らかにした。室内実験での現象と現場での実現象との比較検討が今後の課題と言える。

2-C-10-2では、人口干潟における海水の貧酸素化とアサリの生残状況についての報告がなされた。調査は尼崎港に造成された人工干潟上にてDOや水温・塩分のセンサーを設置することで、連続的なモニタリングを行った。その結果、夏場に貧酸素化した海水の流入が観測され、それに伴うアサリの生息数が激減した。結果、貧酸素化の改善に向けた検討が今後の課題といえる。

いずれも、現地での問題に取り組む貴重なデータが得られ、研究の進展に貢献している。しかしながら、調査を主体とした現状把握や問題点の抽出に限られ、継続的なモニタリングとともに、問題解決のための一歩踏み込んだ新たなアプローチも必要と言えよう。さらなる展開に期待したい。

（佐賀大学・低平地沿岸海域研究センター 山西 博幸）